あ 小豆洗いという化け物がいる。

湯船に浸かるというのその音がした。
籠の中で小石を擦りあわせる繊細な音を鋳た。
たらまら眠気が差し、幾度か湯れかけた。心配した母は、
家中に札を貼る。
いつしか怪異は消え失せたが、灯芯を仰ぐ俺の耳はその
震えを覚えていた。

い 一反木綿という化け物がいる。

窓を白いものが過る。見る間に隣の庭へ流され、子供の
悲鳴が上がった。
見れば芝生にシーツが広がり、端から小さな靴を履いた
足が伺える。とんだ枯れ尾花だ。俺は欠伸まじりに台所へ
向かう。
紅茶を手に戻ってみると子供も布も消えていた。

う 海座頭という化け物がいる。

道の向こうから小さな影が近付いていた。
「一曲吟じまする。ご所望、ご所望」
盲い、杖を突いた老人である。
「所望？」
老人は背中の琵琶を下ろし始めた。
断るより速く、音が辺りを震わせる。瞬時に水が押し寄
せ、俺は空気を求めて足掻いた。

いまだ人という化け物に会れず
現世をさまよう

(c) 2014 ドーナツ
使用フォント：モンテスタ学さま
http://www.mopstudio.jp/
使用画像：ヒュースピクトグラム2.0
http://pictogram2.com/

え 煙々羅という化け物がいる。

俺は紫煙で輪を拵え、税に入っていた。
煙の重なりに柔らかい影が浮かび上がる。笑っている女
の口元に見えた。
記憶を探る俺を他所に黒電話が鳴り出す。
「なあ知ってたか？」
訃報を伝える友人の言葉は遠く、俺は彼女のえくぼを思
い出していた。

お こそこそ岩という化け物がいる。

拍子木の音が家中まで響いてくる。最近、不審火が絶え
なかった。
「怖い、怖い」
縁側を渡るしな俺は呟きを捉える。
「明日は我が身」
「大事ない。水神様がいらっしゃる」
見回すが、誰の姿もなかった。井戸の傍に石が幾つか転
がっている。

か 座敷坊主というけ物がいる。

「遊ぼう」
親戚の子供だろうか。法事に付き合わされた挙句に子供
の世話とは嫌になる。
「お母さんなぁ？」
「居してる」
仕方なく庭に放ってあったバットを手に投げ合った。
「まだだよ。もうちょっとだけ」
縁者の煙草が漂い、子供の姿は薄らいだ。

き 提灯お化けという化け物がいる。

岐阜提灯を受け取り俺は店のガラス戸へ手をかけた。
しかし、軒に何かが下がっている。
破れた厠から目を垂らし目玉を描いた提灯だった。
「おいっ」
留守なのか主人の返事はない。幅広に提灯が置かれ、お
持ち下さいと紙が貼られていた。

く 猫又という化け物がいる。

「お母さんいる？」
庭に祖母が竹ぼうきを持っていた。俺は幅広い、俺の猫を抱へ向か
う。だが、母は俺の話をかまを聞かず、忙しいと言下に
断じた。
縁側に戻ってみると祖母の姿が見えない。
「あの婆さん。今夜が峠だよ」
猫が話したのは、その一度きりだ。

け 幽霊傘という化け物がいる。

シャッターの下りた店先で俺は煙草を喫んでいた。降り
出した雨は弱まる気配もない。
「痛！」
足元に傘が転がっている。渡りに船と開いた途端、腕が
引かれ、足は浮き上がった。柄を離した俺は地面に尻餅を
着く。
傘は空へと遠ざかっていった。

こ 一目入道という化け物がいる。

その男は姿延っていた。片目が眼帯に覆われている。
俺は男の素性を問へ尋ねた。だが、その度に男は消え
失せる。
再び俺は窓外へ目をやった。男は眼帯に手をかけていた。
外し始める。
目を逸らそうと努めるが体は微動だにしなかった。

さ 座敷わらしという化け物がいる。

「遊ぼう」
親戚の子供だろうか。法事に付き合わされた挙句に子供
の世話とは嫌になる。
「お母さんなぁ？」
「居してる」
仕方なく庭に放ってあったバットを手に投げ合った。
「まだだよ。もうちょっとだけ」
縁者の煙草が漂い、子供の姿は薄らいだ。

し 提灯お化けという化け物がいる。

岐阜提灯を受け取り俺は店のガラス戸へ手をかけた。
しかし、軒に何かが下がっている。
破れた厠から目を垂らし目玉を描いた提灯だった。
「おいっ」
留守なのか主人の返事はない。幅広に提灯が置かれ、お
持ち下さいと紙が貼られていた。

す 猫又という化け物がいる。

「お母さんいる？」
庭に祖母が竹ぼうきを持っていた。俺は幅広い、俺の猫を抱へ向か
う。だが、母は俺の話をかまを聞かず、忙しいと言下に
断じた。
縁側に戻ってみると祖母の姿が見えない。
「あの婆さん。今夜が峠だよ」
猫が話したのは、その一度きりだ。

せ 幽霊傘という化け物がいる。

シャッターの下りた店先で俺は煙草を喫んでいた。降り
出した雨は弱まる気配もない。
「痛！」
足元に傘が転がっている。渡りに船と開いた途端、腕が
引かれ、足は浮き上がった。柄を離した俺は地面に尻餅を
着く。
傘は空へと遠ざかっていった。

そ 一目入道という化け物がいる。

その男は姿延っていた。片目が眼帯に覆われている。
俺は男の素性を問へ尋ねた。だが、その度に男は消え
失せる。
再び俺は窓外へ目をやった。男は眼帯に手をかけていた。
外し始める。
目を逸らそうと努めるが体は微動だにしなかった。

た 座敷わらしという化け物がいる。

「遊ぼう」
親戚の子供だろうか。法事に付き合わされた挙句に子供
の世話とは嫌になる。
「お母さんなぁ？」
「居してる」
仕方なく庭に放ってあったバットを手に投げ合った。
「まだだよ。もうちょっとだけ」
縁者の煙草が漂い、子供の姿は薄らいだ。

ち 提灯お化けという化け物がいる。

岐阜提灯を受け取り俺は店のガラス戸へ手をかけた。
しかし、軒に何かが下がっている。
破れた厠から目を垂らし目玉を描いた提灯だった。
「おいっ」
留守なのか主人の返事はない。幅広に提灯が置かれ、お
持ち下さいと紙が貼られていた。

つ 猫又という化け物がいる。

「お母さんいる？」
庭に祖母が竹ぼうきを持っていた。俺は幅広い、俺の猫を抱へ向か
う。だが、母は俺の話をかまを聞かず、忙しいと言下に
断じた。
縁側に戻ってみると祖母の姿が見えない。
「あの婆さん。今夜が峠だよ」
猫が話したのは、その一度きりだ。

て 一目入道という化け物がいる。

その男は姿延っていた。片目が眼帯に覆われている。
俺は男の素性を問へ尋ねた。だが、その度に男は消え
失せる。
再び俺は窓外へ目をやった。男は眼帯に手をかけていた。
外し始める。
目を逸らそうと努めるが体は微動だにしなかった。

と 海座頭という化け物がいる。

道の向こうから小さな影が近付いていた。
「一曲吟じまする。ご所望、ご所望」
盲い、杖を突いた老人である。
「所望？」
老人は背中の琵琶を下ろし始めた。
断るより速く、音が辺りを震わせる。瞬時に水が押し寄
せ、俺は空気を求めて足掻いた。

な 一反木綿という化け物がいる。

窓を白いものが過る。見る間に隣の庭へ流され、子供の
悲鳴が上がった。
見れば芝生にシーツが広がり、端から小さな靴を履いた
足が伺える。とんだ枯れ尾花だ。俺は欠伸まじりに台所へ
向かう。
紅茶を手に戻ってみると子供も布も消えていた。

に 小豆洗いという化け物がいる。

湯船に浸かるというのその音がした。
籠の中で小石を擦りあわせる繊細な音を鋳た。
たらまら眠気が差し、幾度か湯れかけた。心配した母は、
家中に札を貼る。
いつしか怪異は消え失せたが、灯芯を仰ぐ俺の耳はその
震えを覚えていた。

ぬ 海座頭という化け物がいる。

海座頭という化け物がいる。
道の向こうから小さな影が近付いていた。
「一曲吟じまする。ご所望、ご所望」
盲い、杖を突いた老人である。
「所望？」
老人は背中の琵琶を下ろし始めた。
断るより速く、音が辺りを震わせる。瞬時に水が押し寄
せ、俺は空気を求めて足掻いた。

ね 猫又という化け物がいる。

「お母さんいる？」
庭に祖母が竹ぼうきを持っていた。俺は幅広い、俺の猫を抱へ向か
う。だが、母は俺の話をかまを聞かず、忙しいと言下に
断じた。
縁側に戻ってみると祖母の姿が見えない。
「あの婆さん。今夜が峠だよ」
猫が話したのは、その一度きりだ。

の 一反木綿という化け物がいる。

窓を白いものが過る。見る間に隣の庭へ流され、子供の
悲鳴が上がった。
見れば芝生にシーツが広がり、端から小さな靴を履いた
足が伺える。とんだ枯れ尾花だ。俺は欠伸まじりに台所へ
向かう。
紅茶を手に戻ってみると子供も布も消えていた。

は 小豆洗いという化け物がいる。

湯船に浸かるというのその音がした。
籠の中で小石を擦りあわせる繊細な音を鋳た。
たらまら眠気が差し、幾度か湯れかけた。心配した母は、
家中に札を貼る。
いつしか怪異は消え失せたが、灯芯を仰ぐ俺の耳はその
震えを覚えていた。

ひ 座敷わらしという化け物がいる。

「遊ぼう」
親戚の子供だろうか。法事に付き合わされた挙句に子供
の世話とは嫌になる。
「お母さんなぁ？」
「居してる」
仕方なく庭に放ってあったバットを手に投げ合った。
「まだだよ。もうちょっとだけ」
縁者の煙草が漂い、子供の姿は薄らいだ。

ふ 提灯お化けという化け物がいる。

岐阜提灯を受け取り俺は店のガラス戸へ手をかけた。
しかし、軒に何かが下がっている。
破れた厠から目を垂らし目玉を描いた提灯だった。
「おいっ」
留守なのか主人の返事はない。幅広に提灯が置かれ、お
持ち下さいと紙が貼られていた。

へ 猫又という化け物がいる。

「お母さんいる？」
庭に祖母が竹ぼうきを持っていた。俺は幅広い、俺の猫を抱へ向か
う。だが、母は俺の話をかまを聞かず、忙しいと言下に
断じた。
縁側に戻ってみると祖母の姿が見えない。
「あの婆さん。今夜が峠だよ」
猫が話したのは、その一度きりだ。

ほ 一反木綿という化け物がいる。

窓を白いものが過る。見る間に隣の庭へ流され、子供の
悲鳴が上がった。
見れば芝生にシーツが広がり、端から小さな靴を履いた
足が伺える。とんだ枯れ尾花だ。俺は欠伸まじりに台所へ
向かう。
紅茶を手に戻ってみると子供も布も消えていた。

ま 海座頭という化け物がいる。

道の向こうから小さな影が近付いていた。
「一曲吟じまする。ご所望、ご所望」
盲い、杖を突いた老人である。
「所望？」
老人は背中の琵琶を下ろし始めた。
断るより速く、音が辺りを震わせる。瞬時に水が押し寄
せ、俺は空気を求めて足掻いた。

み 煙々羅という化け物がいる。

俺は紫煙で輪を拵え、税に入っていた。
煙の重なりに柔らかい影が浮かび上がる。笑っている女
の口元に見えた。
記憶を探る俺を他所に黒電話が鳴り出す。
「なあ知ってたか？」
訃報を伝える友人の言葉は遠く、俺は彼女のえくぼを思
い出していた。

む こそこそ岩という化け物がいる。

拍子木の音が家中まで響いてくる。最近、不審火が絶え
なかった。
「怖い、怖い」
縁側を渡るしな俺は呟きを捉える。
「明日は我が身」
「大事ない。水神様がいらっしゃる」
見回すが、誰の姿もなかった。井戸の傍に石が幾つか転
がっている。

め 一目入道という化け物がいる。

その男は姿延っていた。片目が眼帯に覆われている。
俺は男の素性を問へ尋ねた。だが、その度に男は消え
失せる。
再び俺は窓外へ目をやった。男は眼帯に手をかけていた。
外し始める。
目を逸らそうと努めるが体は微動だにしなかった。

や 幽霊傘という化け物がいる。

シャッターの下りた店先で俺は煙草を喫んでいた。降り
出した雨は弱まる気配もない。
「痛！」
足元に傘が転がっている。渡りに船と開いた途端、腕が
引かれ、足は浮き上がった。柄を離した俺は地面に尻餅を
着く。
傘は空へと遠ざかっていった。

ゆ 座敷わらしという化け物がいる。

「遊ぼう」
親戚の子供だろうか。法事に付き合わされた挙句に子供
の世話とは嫌になる。
「お母さんなぁ？」
「居してる」
仕方なく庭に放ってあったバットを手に投げ合った。
「まだだよ。もうちょっとだけ」
縁者の煙草が漂い、子供の姿は薄らいだ。

よ 小豆洗いという化け物がいる。

湯船に浸かるというのその音がした。
籠の中で小石を擦りあわせる繊細な音を鋳た。
たらまら眠気が差し、幾度か湯れかけた。心配した母は、
家中に札を貼る。
いつしか怪異は消え失せたが、灯芯を仰ぐ俺の耳はその
震えを覚えていた。

ら 海座頭という化け物がいる。

道の向こうから小さな影が近付いていた。
「一曲吟じまする。ご所望、ご所望」
盲い、杖を突いた老人である。
「所望？」
老人は背中の琵琶を下ろし始めた。
断るより速く、音が辺りを震わせる。瞬時に水が押し寄
せ、俺は空気を求めて足掻いた。

り 一反木綿という化け物がいる。

窓を白いものが過る。見る間に隣の庭へ流され、子供の
悲鳴が上がった。
見れば芝生にシーツが広がり、端から小さな靴を履いた
足が伺える。とんだ枯れ尾花だ。俺は欠伸まじりに台所へ
向かう。
紅茶を手に戻ってみると子供も布も消えていた。

る 座敷わらしという化け物がいる。

「遊ぼう」
親戚の子供だろうか。法事に付き合わされた挙句に子供
の世話とは嫌になる。
「お母さんなぁ？」
「居してる」
仕方なく庭に放ってあったバットを手に投げ合った。
「まだだよ。もうちょっとだけ」
縁者の煙草が漂い、子供の姿は薄らいだ。

れ 煙々羅という化け物がいる。

俺は紫煙で輪を拵え、税に入っていた。
煙の重なりに柔らかい影が浮かび上がる。笑っている女
の口元に見えた。
記憶を探る俺を他所に黒電話が鳴り出す。
「なあ知ってたか？」
訃報を伝える友人の言葉は遠く、俺は彼女のえくぼを思
い出していた。

ろ 海座頭という化け物がいる。

道の向こうから小さな影が近付いていた。
「一曲吟じまする。ご所望、ご所望」
盲い、杖を突いた老人である。
「所望？」
老人は背中の琵琶を下ろし始めた。
断るより速く、音が辺りを震わせる。瞬時に水が押し寄
せ、俺は空気を求めて足掻いた。

わ 化け物がないと思うのはかえってほんとうの迷信である。
宇宙は永久に怪異に満ちている。あらゆる科学の書物は百
鬼夜行絵巻物である。それをひもといてその怪異に戦慄す
る気持ちがなくなれば、もう科学は死んでしまうのである。

寺田寅彦著「化け物の進化」より

百鬼夜行　十番勝負

(c) 2014 ドーナツ

作者　ドーナツ

twitter：https://twitter.com/donut_no_ana

ドーナツの穴（小説のみ）：

http://donutno.github.io/

※楠樹暖さんの「楠樹式折本」を参考にしました。

作成方法の図も楠樹さんが作成されたものです。

http://oritoyo.wook.jp/

※お化けの絵が上になります